



ジブリの絵職人 男鹿和雄展

11/22(土)~1/18(日)

「となりのトトロ」の森や田園風景を始めとする、スタジオジブリのアニメの背景画を手がけた作家、男鹿和雄の大規模な展覧会です。既に何度か作家本人も来館し、当館の構造や雰囲気合わせた展示図面を作成中です。本展では初期から最新作まで約700点もの原画を紹介し、加えてアニメの製作過程、作家のアトリエの再現や実物大のトトロの家、さらに参加型の映像や折紙コーナーも設置する予定です。吹き抜けや小部屋の構造を最大限に生かし、2階全体がジブリワールドになります。また、作家との写生会を始めとする各種関連イベントも計画中です。現在、9月の前売券発売開始へ向けて、ポスターやちらしの制作を始めています。(H.S.)

男鹿和雄(ポートレート)

2009/2/14(土)~3/29(日)

陸地梅太郎展 山のいのち、人のめくもり

「山の版画家」として知られる本県出身の陸地梅太郎。本展では、山や山男の版画に加えて、初期から戦前にかけての動向も紹介する予定です。目下、1300点に及ぶ原画の整理と並行して、陸地をとりまく版画家たちの作品や、彼らとともに陸地が参加した版画雑誌の調査を行うとともに、ご遺族のもとでは、生前の様子がかがえる写真の数々を拝見しました。作品や関連資料から何を選んでどのように展示するのか。それによって、鑑賞者にとっての作家像は大きく左右されます。そうした意味でも、彼の作品の魅力を十分にお伝えすべく、今後できるだけ多くの資料にあたり、見ごたえのある展示に仕上げたいと思います。(C.H.)



陸地梅太郎「白い像」1958年(部分)



写真(登山、アトリエ)

info.1

第4回愛媛県美術館講座&アトリエ展

3年に1度開催している「愛媛県美術館講座&アトリエ展」を、この秋開催します。展覧会では、当館普及事業の紹介・報告を兼ねて、美術館で実施した講座で制作した作品やアトリエ利用者の作品を展示します。講座やアトリエ利用で制作した作品を出品し、展示する楽しみ、喜びを経験してはいかがでしょうか。みなさんの出品をお待ちしております。

- 展覧会
 - ・会期: 10月30日(木)~11月3日(月)
 - ・会場: 新館 2階 特別展示室
 - ・入場無料
- 作品募集
 - 平成18年4月以降、当館で開催した講座等で制作した作品、当館のアトリエを利用した作品を募集します。

出品方法は、美術館内に設置している「作品募集のご案内」に従い、9月30日(火)までにお申し込みください。また、詳しくはホームページでもご案内しています。

ハトの声(編集後記)

最近、世間是不景気な話ばかり。その状況は美術館も同様で、カンフォロもとうとう1色刷りの時代がやってきました。発行回数も年に2回となります。とは言え、みなさんに楽しんでいただけるような内容をお届けできるよう、試行錯誤しながら発行していきたいと思っています。また、みなさんのご意見、感想もお聞かせください。(M.I.)

info.2

友の会アトリエ教室 木口木版画を作ってみよう

木版画といえば木を縦に切り出した木材を使う板目木版が一般的ですが、木を横に輪切りにした木口を版材に使う木口木版の教室を開催します。木口は板目と違って、面が堅いので銅版画のような精密で繊細な線刻ができます。現在、その版材はなかなか入手困難で、今回は講師より貴重な樹齢約130年の藪椿を講師からわけていただくことになっています。実際に制作に取り組み、木口木版の魅力に触れてみませんか。

- 講師: 土居明生氏(木口木版画家)
- 日程: 11/16・11/23・11/30 各日曜日 13:30~16:00
- 定員: 10名
- 受講料: 4,000円 ●材料代: 3,000円程度
- ※対象は友の会会員となります。※詳細については、お問い合わせください。

info.3

開館記念日

美術館の開館記念日を祝して、今年は11月30日(日)に、常設展示室の観覧料を無料にするなど、様々な催しものを計画中です。今年は、開館10周年ということで、1万点を超える所蔵品の中から選りにすぐりの名品を展示する「アート散歩道」も開催します。とにかくお楽しみに!!

ご利用案内

- 開館時間 9:40~18:30(入室は18:00まで) 企画展の終了時間は、展覧会により異なります。
 - ※南館の県民ギャラリーは18:00に閉室します。
 - ※実行委員会及び貸展については、入室時間が異なることがあります。各展覧会のページでお確かめください。
- 休館日 祝日、振替休日及び第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館・年末年始(12月29日~1月3日)
- 分館(萬翠荘)の休館日について 愛媛県教育委員会では、平成20年9月中旬まで屋根の葺替え、躯体保全等の改修工事を実施しており、それに伴い萬翠荘は休館しています。なお、愚陀仏庵及び茶房「あい」については、これまでどおりご利用いただけます。

企画展 八犬伝の世界展



辻村ジュサブロー (NHK「新八犬伝」犬山節節人形) 館山市立博物館

平成20年7月19日[土]~8月31日[日]

休館日は、毎週月曜日(祝日、振替休日及び第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館)

●時間/9:40~18:00(入場は17:30まで)

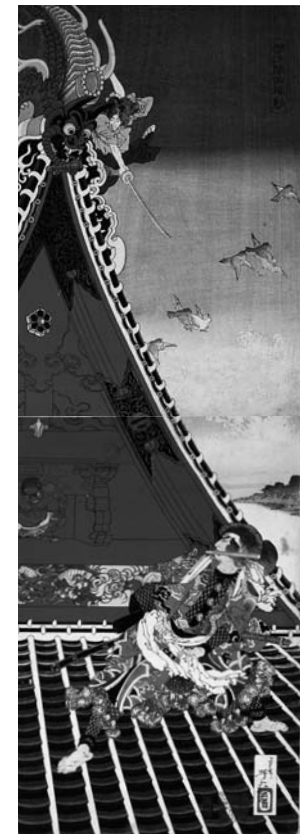
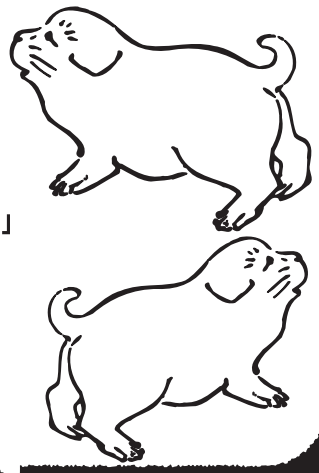
曲亭馬琴(1767-1848)が、48歳から28年間にもわたって執筆・刊行した読本『南総里見八犬伝』。善悪入り乱れて様々なエピソードが繰り広げられる全98巻106冊にもおよぶ我が国最大の長編伝奇小説です。刊行後もなく、歌舞伎などで上演され、関連する錦絵などの出版物もおびただしく制作されました。子どもから大人まで、世代を問わず人々を夢中にさせたその世界は、江戸時代後期の文化を集約したものと言えます。

その人気は明治以降も途絶えることなく、現在に至るまで美術、文学、漫画、映画、演劇などさまざまな分野で取り上げられています。原作は読んだことがなくても、例えばNHKの人形劇や市川猿之助のスーパー歌舞伎などを通して、あらずじや登場人物について知っているという方も多いのではないのでしょうか。

2008年は馬琴没後160年に当たります。浮世絵をはじめ、錦木清方ら近代日本画、現代の宝塚歌劇・少女漫画・横尾忠則まで一これらを機に、この展覧会では多彩な創作物を通して、極上のエンターテインメント『八犬伝』の世界を集大成し、その魅力を紹介します。(T.N.)

関連講座

- 記念講演会「浮世絵の『八犬伝』」7/19(土) 14:00~16:00 ※要申込 講師: 服部仁氏(同朋大学教授、本展監修者)
- 学芸員によるフロアレクチャー 毎週水曜日 14:00~15:00 ※申込不要 ただし企画展観覧券または友の会会員証が必要です。
- ワークシートによる対話型鑑賞プログラム「たんけん!はっけん!八犬伝!!」7/27(日)・8/3(日)・10(日)・17(日)・24(日)・31(日) 9:40~17:00 ※申込不要。ただし企画展観覧券または友の会会員証が必要です。
- 映画上映会「里見八犬伝」(1983年、出演:薬師丸ひろ子、真田広之) 7/21(月・祝)、8/17(日) 14:00~ ※無料。申込不要
- 美術講座「描かれた『八犬伝』」8/9(土) 14:00~16:00 ※申込不要 ※その他、落語奇席・曲楽など江戸の大衆文化が味わえるイベントも開催予定です。詳細はお問い合わせください。



月岡芳年(芳流閣舟遊動) 服部仁氏蔵

独 日本美術名品展

企画展 美がむすぶ絆
ベルリン国立アジア美術館所蔵

平成20年10月1日[水]~11月16日[日] 毎週月曜日(祝日、振替休日及び第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館)

※作品の保存上、会期中大幅な展示替えを行います。前期:10/1~26、後期:10/28~11/16

●時間/9:40~18:00(入場は17:30まで)

ドイツの首都・ベルリンに展開する「博物館島」を中心とする国立博物館群は、現在大規模な再編成が進められています。質の高い東洋美術のコレクションで世界的に知られる「ベルリン国立東洋美術館」もその一つ。2006年には、設立100周年を迎えるとともに、インド美術館などと統合し「ベルリン国立アジア美術館」として新たなスタートを切りました。これを記念して開催される本展は、平安時代の仏画から、近世絵画・浮世絵、そして近代の日本画まで、同館のコレクションから選りすぐりの日本美術の名品70点を紹介するもので、16年ぶりの里帰り展となります。

これらのコレクションの形成には、日本美術の優品を海外に紹介した美術商・林忠正をはじめ、日独それぞれの美術関係者が関わっています。2度の大戦や東西分裂などの危機を乗り越えて、守り続けられてきた「美の絆」。日本美術の優品を通して、100年以上にわたる日独文化交流の一端を振り返る機会となることを願います。(T.N.)

本阿弥光悦書、俄屋宗達下絵(四季草花下絵と色紙色帖)のうち「鳥圖」「月圖」江戸時代前期



関連講座

- 美術講座「伯林(ベルリン)が愛した日本の美」 10/18(土) 14:00~16:00 ※申込不要
- ベルリン展トーク(仮) 毎週日曜日 11:00~11:30 作品ガイドボランティアが、毎回1作品を通して対話のお手伝いをします。 ※申込不要。ただし企画展観覧券または友の会会員証が必要です。 ※その他にもイベントを予定しております。 詳細はお問い合わせください。

つぶやき

今年5月より新しくなったHP、デザインも一新されましたが、一番の変化は、メルマガとブログを開始したこと。しかし、ブログのネタはあるとき書きで！といながら、最初に燃え尽きた人に引きつづられ、今日もネタ探しに動んでいきます。メルマガにも特典を付け始めました。動いてみてください！(A.T.)

特集展

育樹祭開催記念 緑の中へ

- 会期／平成20年7月2日(水)～11月3日(月・祝)
- 時間／9:40～18:30(入場は18:00まで)
- 休館日／毎週月曜日(祝日、振替休日及び第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館)

10月25日(土)・26日(日)、第32回全国育樹祭が愛媛県で開催されます。春に芽吹き、やわらかい明黄色の葉を広げた樹木は、夏には青々とした茂みをつくり、爽やかな秋にかけてすくすくと育ちます。秋は、植物が厳しい冬へ向けて栄養を蓄える、重要な季節でもあるのです。

美術館では、様々な作品を通してこのような木々の営みを体験していただくこと、この特集展を企画しました。土田麦僊の《柳蔭》は、柳の青々とした葉、やわらかい枝が伸びやかに広がる六曲一双の屏風です。右隻は木の上部、左隻は中央部を画面いっぱいに描き、真夏の太陽の下、涼しげな木陰を演出しています。小清水漸の《傘の木の石の色の》は、すくっと立つ松の柱の上に桶の傘が広がる、4点組の作品です。滑らかな木肌が、生来の木のかたちに基づくゆるやかな曲線を描き、やさしい新たな「森」をかたちづくっています。

小清水漸 《傘の木の石の色の》1993年



土田麦僊《柳蔭》(左隻)1921年

この他にも、自然をおおらかに表した野間仁根や河本一男等の洋画、デザインの先駆者、杉浦非水の色鮮やかな図案集、吉田勝彦のモノクロームの緻密な版画、大竹敦人の球体写真等、多岐にわたる作品を新たな組み合わせ、空間で展示します。植物の姿そのものを写し取る「写生」から、それらの印象を作家の感性で表現する方法、さらに木そのものを作品とすることによる「再生」とその手段も様々です。

皆さんもこれらの作品と出会い、美術館ならではの森林浴を楽しんでいたいただければ幸いです。(H.S.)

TOPICS

寄贈いただきました!



井出創太郎 (placer d'amor bush <蘭塔婆> 一の山 時の便り) 2007年(部分)

平成19年度は14件の作品を新しく収蔵しました。今回は全て愛媛ゆかりの作家や所蔵家からご寄贈いただいたものです。

関西の実業家・加賀正太郎が自ら栽培、品種改良した蘭を図譜として編集した《蘭花譜》は、一流の彫師、摺師の手になるもので、繊細な線の描写や淡いぼかしの技法が秀逸です。今井庸介の銅版画は、2006年当館で開催した「魚のすがた展」出品が収蔵のきっかけとなりました。魚を主題に古い書物のイメージを織り交ぜた画面は、深海のような静けさが印象的です。井出創太郎の作品は、銅版の技法により石膏キューブに植物の姿を写し取り、それを積み重ねたもの。昨年度本県で開催したアートプロジェクトの際、別子銅山の供養塔・蘭塔婆を取材して制作されたものです。愛媛の美術教育に長年たずさわった荒木清秋による人物画は、水彩によるみずみずしい色彩が際立っています。人間をテーマに重厚な表現を見せる市野英樹と本田希枝、そして現代社会への鋭い視点をもって幻想的な画面を創り出す横地光らの作品は、いずれも大型で見ごたえのある油彩画です。多彩な顔ぶれの新収蔵品。お披露目は6月末で終わりましたが、今後も当館のテーマ展示等で活躍してもらうこととなります。(C.H.)



加賀正太郎(編)《蘭花譜》1946年

ホームページがリニューアル!

この春、見やすく、わかりやすく、を心がけ、ホームページがリニューアルしました。新たにブログやメルマガも始め、美術館の日々の動きとともに、スタッフの奮闘ぶりがかうかがえます。美術館の話題に乗り遅れないように、欠かさずチェックしてみてください。http://www.ehime-art.jp/ とにかくお楽しみに!!



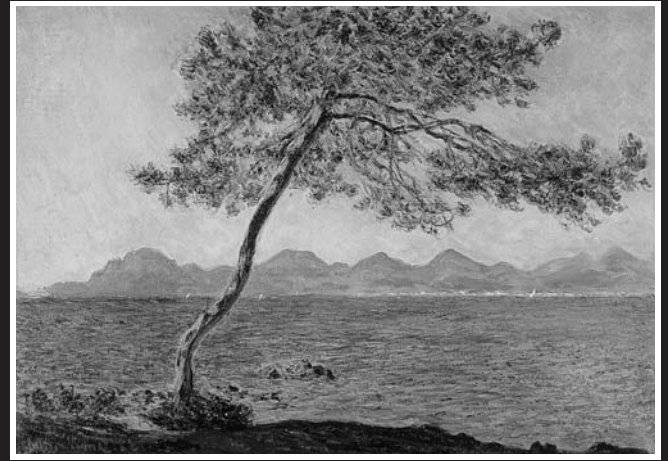
特集展「西洋美術の精華」より

クロード・モネ《アンティープ岬》

細やかな筆触が地中海沿岸の光景を豊かに織り成す本作は、印象派の画家モネ(1840-1926)の手になるものです。興味深いのは、一本松を前景にクローズアップし、背景と対比させた構図です。ロンドンのコートールド美術研究所にも、同じ主題、同じ構図の異作が所蔵されています。

この奇抜な構図は画面に臨場感を与えていますが、モネ独自のものかといえば、そうではありません。実際、日本の秋田蘭画や浮世絵に散見され、西洋絵画にも僅かなから先例は見出されます。では、モネの脳裏をよぎったものは何だったのか。それは浮世絵だ、とする説が1975年に公表されています。75-76年に米国内3会場を巡回した「ジャポニスム:フランス美術に対する日本の影響 1854-1910」展の図録へ、G.ニーダムが寄せた同名の論文です。ニーダムは、ロンドンの作品と歌川国芳「東海道五拾三駅四宿名所 保ヶ谷・戸塚・藤沢・平塚」を挿図に用いた上で、モネの絵画の中に、「鮮烈な効果を画面に付与するために前景へ木を添える、日本の版画によく見られる構図の反映」を認めています。

ここで想起されるのは、モネが日本鼻祖だったということです。彼の旧宅には、浮世絵を中心とする日本版画コレクションが残されているのです。(N.T.)



1888年 油彩・画布

常設展示室にて、11/3(月・祝)まで展示しています。

普及レポート

アトリエ同好会 銅版画展

6月4日(水)から8日(日)まで南館2Fにおいて、昨年度の「アトリエ同好会 銅版画展」の1年間の成果を発表しました!展示するなら制作にも追い込みがかり、慌ただしく6月を迎えました。その甲斐もあり、展示室が埋まるかと心配したのが嘘のように90点を越える作品が集まり、大変にぎやかな展示室になりました。来場者も5日間で688名。交替で展示室の受付をしましたが、銅版画の技法説明や感想を実際にお話できるのがまた楽しく、あっという間の5日間でした。最終日には、会場内で、インクを使わず紙に凸凹をつけるだけの手軽な版画「でこぼこ版画(エンボス)」を実施し、紙にプレスされた陰影を楽しみました。毎年テーマを変えて実施しているアトリエ同好会ですが、今

年度は、「染織」を実施中です。みんなで高機に糸を張り少しずつ織り体験を行ったり、糸を染めたり、紡いだりと参加者の希望に沿う形でのんびりと実施しています。興味のある方は8月17日(日)のアトリエ2を覗いてみてください。(A.T.)



普及レポート

幼児のための対話型鑑賞プログラム 「ことば de あ・そ・ぼ」

美術館では昨年に引き続き、鑑賞プログラム「ことば de あ・そ・ぼ」を4月12日(土)と13日(日)の2日間、常設展示室で開催しました。プログラムは、まず、みんなで車座になりお互いの自己紹介から始まります。それが終わると8名ほどの子どもたちに「大きい」「楽しい」等の言葉が書かれたカードを一枚ずつ渡し、その言葉を体で表したり、自分がイメージするもの(例「大きい=僕のお父さん」等)を話したりと、みんなで言葉の意味を共有していきます。そしていよいよ作品の前へ。今回最初に楽しんだのは豊嶋の《Rainbow Rain》。先ほどの言葉カードを使って作品の感想を話していきます。初めはカードに頼っていた子どもたちも、リラックスしてくるとどんどん自分の知っている言葉を使って感想を話し始めます。その後は井川輝亮《Peinture 空中の花》へ。この頃になると子ども達からは作品の「壊れ具合?」を見て今後の保存方法について心配する声から、想像を本当に豊かに膨らませたものまで、いろいろな意見が出てきます。プログラムはここで終了。(4、5歳児にはここまでが限度です。)このプログラムは作品をみて自分の考えたことを話すことを目的としているため、作家の名前や素材のお話は一切しません。しかし、作品を「みる」ことはとても面白いこと、美術館は楽しい場所だということを伝えるためとても大切なプログラムとなっています。(Y.S.)



普及レポート

「黒」の魅力を探って

今年度、「黒」という色をテーマにした講座をいくつか実施しています。

その第1弾、「クロイロどんな色?」では、鉛筆を塗り重ねてできる黒を楽しみました。画用紙の裏に無作為に切ったいろいろな形の厚紙を貼り付け、画用紙の表を鉛筆で塗り重ね、裏の厚紙の図柄を擦り出しました。ひたすら根気強く鉛筆を動かし、芯の硬さによる鉛筆の色の違い、塗り重ね方による黒の調子の違いを体験しました。

第2弾、「墨deあそぼ」では、2日間の工程で、墨の黒(色)にこだわる講座を行いました。1日目は、作品制作。墨の濃淡や、にじみ、かすれを生かし、自由に絵や文字を描きました。特に子どもたちは、普段、使わないわしや大きな刷毛を使って描く場面では、練習用の新聞紙をつなぎあわせた大きな画面に、いきいきと筆を走らせていました。2日目は、軸作り。墨で表装の和紙をにじませ、軸も着色し、作品に合わせた風合いの軸を作りました。最後に1日目に制作した自作を軸に貼り付け、完成。紙の白と墨の黒のバランスの妙に加えて、朱の落款、ポイントに入れた金彩により、味わいのある渋い軸ものが出来上がりました。

今回は、植物の姿を写真、銅版画、拓本を使って、モノクロ(白黒)で写し取るという講座も予定しています。様々な素材から生まれる黒色に触れ、黒の魅力を楽しんでもらいたいと思います。(M.I.)



「クロイロどんな色?」

迫力の巨大魚が描けたゾ!



「墨deあそぼ」

つぶやき

イタリア美術とナポレオン展(7月7日閉幕)の会期中に4回、アンサンブルさくらによる音楽会を催しました。展示物の制作年代を意識して伊、仏の楽曲を中心に構成したプログラムによる演奏会は、美術館という場で聴くことで、印象も一味違ったのではないのでしょうか。今後も異文化を総合的に楽しめる空間創出に努めて参りますので、御覧願。(N.T.)

N.T.